

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

物語の構成がシンプルで読みやすかった。メロスが正義感から王城に乗り込んだと思ったら命乞いをし、また、覚悟を決め刑場へ向かったけど疲れ倒れ込んだら「私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんも無かった。」と自分に言い聞かせたり、「ああ、もう、どうでもいい。」と自暴自棄になったりするなどこのとても人間らしい心情の変化が面白く、主人公のメロスがとても印象に残った。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年 (昭和15年)

ジャンル：短編小説 フィクション

舞台：紀元前5世紀～4世紀のシチリア島のシラクサ市

③あらすじ

村から町にやって来たメロスは町が静まり返っていることに気づく。そこで老翁から王が人を信じられないために処刑をしていることを聞き、メロスは激怒する。王城に乗り込んだメロスだが捕らえられ、ディオニス王の前に引きだされる。メロスは妹の結婚式のために、友人のセリヌンティウスを人質として、村へ出発する。その後、宴会を楽しんだメロス、だがついに約束の日がやってくる。決意をし、出発したメロスだったが、多くの困難に行く手を阻まれ、ついには疲れ果て眠ってしまう。その後岩の裂け目から湧く水を飲み、メロスは再び走り出す。途中、セリヌンティウスの弟子フィロストラトスにもう処刑には間に合わないと告げられるも、メロスは走り続けた。日没直前メロスはついに刑場に到着し、セリヌンティウスの処刑を止めることができた。二人は一度だけ友を裏切り、疑ったことを告白し、互いに頬を打ちあう、王は人を信じる心を認め、群衆も歓声を上げる。その後裸体だったメロスは少女からマントを受け取り赤面するのだった。

④登場人物の分析

・メロス 急に王城に乗り込むなど、後先を考えない性格だが老翁から話をきき、ディオニス王を除かなければならないと決意したことから正義感が強い人物だと考えられる。また、捕らえられ王の前にひきだされたとき、「妹に、亭主を持たせてやりたいのです。」と妹の結婚式のために「私は、ちゃんと死ぬる覚悟で居るのに。命乞いなど決してしない。」と言っていたにも関わらず命乞いをした。つまり、自分の正義よりも妹を優先したことから、非常に妹のことを思っており、大好きだと考えられる。

・セリヌンティウス メロスから急に人質の話をしてきても、「セリヌンティウスは無言で首肯うなずき、メロスをひしと抱きしめた。」と描かれていた。メロスから「私を殴れ。ちからいっぱい頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若もし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえ無いのだ。殴れ。」と言われたときはすべてを察した様子でうなずき、メロスの右頬を殴ったこの行動から、メロスの苦しみや後悔の気持ちを理解し、受け止めていることが分かる。つまり、状況整理・判断、人の気持ちなどを察する能力に長けており、冷静で非常に落ち着いた人物だと考えられる。

・ディオニス王 彼は冷酷な暴君として描かれているが、「人の心は、あてにならない。」

人間は、もともと私慾のかたまりさ。信じては、ならぬ。」という言葉からわかる通りその根底には「人は信じられない」という強い不信感がある。つまり、残酷な性格なのではなく、人を疑い続けた結果として孤独になった人物だと考えられる。メロスとセリヌンティウスの友情に心を動かされ、最後には「おまえらの望みは叶えなかつたぞ。おまえらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」と人を信じることの大切さを認めた点から、ディオニス王はこの物語の中で唯一考え方などが変化している存在として描かれている。

⑤作品のテーマについて

『走れメロス』の中心的なテーマは、「人を信じることの大切さ」と「友情の力」であると考えられる。

【理由】

物語の中でディオニス王は、「人の心は、あてにならない。」と述べ、人間不信の考えを持っている。これは、人間は信用できない存在だという考えを象徴している。一方でメロスは、友人セリヌンティウスを人質にしてまで妹の結婚式へ向かうが、約束を守るために命がけで走り続けた。この行動は、友人を裏切らないという強い信念と友情の証である。また、セリヌンティウスもメロスが戻ってくると信じ続け、逃げることはなかつた。この二人の行動は、人は互いに信じ合うことができる存在であることを示している。最終的に王も二人の姿を見て、人を信じることの大切さを認めるようになる。つまり、中心人物 3 人を通して「人を信じること」と「友情」が描かれているため、「人を信じることの大切さ」と「友情の力」が『走れメロス』の中心的なテーマだと考えられる。

⑥印象に残った表現

特に印象に残った表現はメロスがシラクスの町へ必死に走っている場面で「呼吸もできず、二度、三度、口から血が噴き出た」という表現だ。この少し前にある、「メロスは黒い風のように、、、」や「少しずつ沈んでゆく太陽の10倍も、、、」などはとても速さで走っていることはわかるが現実味がなさすぎて想像ができない。だがこの表現によってどれだけメロスが必死に走っていることが読者にひしひしと伝わってきて、読者が物語に入り込める一因となっている。

⑦作者・太宰治について

太宰治は、1909年に青森県で生まれた日本の小説家である。本名は津島修治であり、日本の近代文学を代表する作家の一人である。

太宰治の作品には、人間の弱さや苦しみ、葛藤が描かれることが多い。代表作には、人間失格、斜陽、などがある。

『走れメロス』は、ドイツの作家であるシラーの人質をもとにして書かれているが、太宰治は人間の弱さと、それを乗り越えようとする強さを加えて描いている。

太宰治自身も人生の中で多くの苦しみや挫折を経験しており、そのため人を信じることの難しさと尊さを深く理解していたと考えられる。その経験が、『走れメロス』の友情と信頼の描写に反映されていると言える。

⑧他作品との比較から分かること

『走れメロス』をより深く理解するために、太宰治の作品である「ヴィヨンの妻」と比較して考察する。

「ヴィヨンの妻」は、放蕩な生活を送る夫と、それでも夫を支え続ける妻の姿を描いた作品である。この作品では、人間の弱さや罪深さが現実的に描かれており、登場人物は理想的な人物ではなく、不完全で弱い存在として表現されている。

一方、『走れメロス』では、メロスとセリヌンティウスの友情は非常に強く理想的なものとして描かれている。メロスは途中で弱気になるものの、最終的には約束を守り、友人の信頼に応えた。

この比較から分かることは、太宰治は人間の弱さだけでなく、人間の持つ強さや美しさも描いているということである。『ヴィヨンの妻』では人間の弱さや現実を描き、『走れメロス』では人間の理想的な友情や信頼を描いている。つまり太宰治は、人間の信頼や友情などの強さだけでなく、その弱さを理解し、作品ごとに異なる形でそれを表現していると考えられる。

⑨時代背景との関係

『走れメロス』が発表された1940年（昭和15年）は、日本が戦争へと進んでいった時代であり、人々の生活や社会に大きな不安が広がっていた時期である。この時代は、国家への忠誠や集団への従属が強く求められ、個人の自由や本当の信頼関係が制限されることも多かった。

このような時代背景の中で、『走れメロス』は「人を信じること」の重要性を強く訴える作品として書かれたと考えられる。王は人間不信の象徴であり、人を信用しない社会の姿を表しているとも読める。

しかしメロスとセリヌンティウスは、命をかけて友情を守った。この姿は、困難な時代であっても、人間同士の信頼は失われるべきではないという作者の願いを表しているのではないだろうか。

つまり本作品は、単なる友情の物語ではなく、不安な時代の中で人間の信頼の価値を改めて問いかける作品であると考えられる。

⑩まとめ（考察）

本作品を作者の背景や時代背景と結びつけて考察することで、『走れメロス』は単なる友情の物語ではなく、人間の本質を問いかける作品であることが分かった。

太宰治は、人間の弱さや苦しみを多く描いてきた作家であるが、本作品では、人間は弱い存在でありながらも、友情や信頼をによって強くなることのできる存在として描かれている。メロスは途中で「もう、どうでもいい。」と弱気になる場面がある。しかし、それでも最後には約束を守るために走り続けた。この姿は、人間は弱さを持ちながらも、自分の意志によってそれを乗り越えることのできる存在であるとされていると思う。

また、「人の心は、あてにならない。」と言っていた王が、最後には人を信じるようになった。この変化から、人間は信頼によって変わることのできる存在だということが示されていると思われる。

現代社会においても、人を信じるのが難しい場面は多い。しかし『走れメロス』は、信頼と友情が人間にとって非常に大切なものであることを教えてくれる作品である。この作品は、時代を超えて人間の生き方を考えさせる重要な文学作品であると言える。

○出典・参考文献

1. Wikipedia「走れメロス」
2. Wikipedia「太宰治」
3. 太宰治「走れメロス」青空文庫
4. 太宰治「ヴィヨンの妻」青空文庫

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

物語の展開の速さと、メロスの行動のまっすぐさが強く印象に残りました。メロスが友人を救うために走り続ける姿は単純にかっこよく、子どもでも大人でも素直に胸を打たれる力があります。また、メロスとセリヌンティウスの友情が最後に確かめられる場面は、裏切りや疑いが一瞬でも頭をよぎったとしても、最終的には「信じてよかった」と思える関係の美しさを感じさせました。物語としては短く読みやすいのに、読み終えたあとに「人を信じるってどういうことだろう」と自然に考えさせられるところが、この作品の魅力だと感じました。特に、メロスが途中で弱気になりながらも再び走り出す場面は、人間の弱さと強さが同時に描かれていて、単なる友情物語以上の深さを持っているように思えました。初読の段階では太宰治の人生や時代背景までは意識していませんでしたが、それでも「信じることの大切さ」を素直に受け取れる物語として心に残りました。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年

ジャンル：短編小説 (児童文学・新心理主義的傾向)

舞台：古代ギリシャのシラクサ (シチリア島の都市)

③あらすじ

村の牧人メロスは、妹の結婚式の準備のために訪れたシラクサの街で、人間不信から自らの親族や臣下を次々と処刑する暴君ディオニス王の残虐非道な行いを知って激昂し、短刀を懐に忍ばせて王城へ乗り込むもあえなく捕らえられ死刑を宣告されますが、妹の婚礼を見届けるための三日間の猶予を請い、竹馬の友である石工セリヌンティウスを身代わりの人質として預けて村へ急行し、豪雨による川の氾濫や山賊の襲撃、そして肉体の限界を超えた疲労からくる「自分だけ助かりたい」という内なる誘惑といった数々の困難と葛藤を、湧き出した清水に救われながら不屈の精神で打ち破り、約束の期限である三日目の日没直前に刑場へ滑り込み、互いに一瞬だけ相手を疑ったことを打ち明け、殴り合うことでその不信を浄化して真の絆を証明し、その信実の輝きに心を打たれた王が自らの過ちを悔いて改心を誓うという、人間の信頼と友情の尊さを極限まで描き切った感動の物語です。

↑あらすじが長すぎると言われたので、必要な部分を残して簡潔にまとめ直した

村の牧人メロスは、妹の結婚式のために訪れたシラクサで暴君ディオニス王の残虐さを知り、怒りから王に立ち向かうが捕らえられてしまいます。妹の婚礼のために三日の猶予を願い、親友セリヌンティウスを人質として預けて村へ戻ります。豪雨や山賊などの困難に苦しみながらも、メロスは約束を守るために走り続け、日没直前に戻ってきます。二人は互いに疑ったことを謝り合い、その友情に心を動かされた王は改心を誓います。

④登場人物の分析

⑤作品のテーマについて

友情と信頼をテーマにした物語。

【理由】

物語の中心には、メロス、セリヌンティウス、そして王様という三人の主要な登場人物がいます。メロスは正義感が強く、友達を非常に大切にしている青年です。彼

は友人セリヌンティウスを救うために、自らの命をかけて走ることを決意します。メロスの行動は、友情の力と信頼の重要性を私たちに教えてくれます。彼の勇気ある行動は、友達のためにどれだけのことができるかを示しています。セリヌンティウスはメロスの親友であり、メロス信じて待ち続ける姿勢を見せます。彼の信頼はメロスに大きな力を与え、友達を信じることの重要性を強調しています。セリヌンティウスの姿勢は、信頼がどれほど強い絆を生むかを示しています。王様は物語の中で最初、他人を信じることができず、非常に疑い深い性格を持っています。しかし、メロスとセリヌンティウスの友情を目の当たりにすることで、彼の心は次第に動かされていきます。王様の変化は、人が変わることができるという希望を私たちに与えてくれます。彼の変化は、信頼と友情が人の心をどのように変えることができるかを示しています。この物語は、友情や信頼がどれほど強い力を持っているかを教えてくれます。メロスの勇気、セリヌンティウスの信頼、そして王様自身の正義感を一切疑わず猪突猛進する純粋さを持ちながらも、降りかかる災難の連続に心が折れ『私は精一杯努めたのだ』と自分を正当化して眠り込もうとする極めて人間臭い弱さを曝け出し、しかし最後には友を裏切る自分自身を殺すために走るという高潔な自己犠牲の精神へと至る主人公のメロスと、彼から命を預けるといふあまりに重い要求を二つ返事で承諾し、処刑が迫る極限状態の中でも友が来ない可能性を一度は疑ってしまった自分を恥じ、再会の瞬間に言葉ではなく拳で語り合うことで真の友情を再構築した石工のセリヌンティウス、さらに孤独な権力の頂点で誰も信じられず、愛する者さえ手にかかる虚無感に支配されながら、死を超越した二人の信頼関係の輝きに触れたことで、鉄面皮のような猜疑心が崩壊し『わしも仲間に入れてくれ』と吐露するに至った暴君ディオニス、そして主人の身を案じながらも絶望的な状況を淡々と伝え、残酷な現実を突きつけることで結果的にメロスの奮起を促す役割を果たした弟子のフィロストラトスといった、それぞれが自己の信念と疑念の間で激しく揺れ動く多面的な内面を持ったキャラクターたちが織りなす極限の心理劇こそが、この物語に単なる道徳劇を超えた普遍的な感動を与えています。

の変化を通じて、私たちは人間関係の大切さを学ぶことができます。物語を通じて、私たちは友情の力と信頼の重要性を再確認し、他者との関係をより深く考えるきっかけを得ることができます。

⑥印象に残った表現

「メロスは激怒した」という言葉が印象に残った。この表現は、メロスの強い感情と決意を示しており、彼の行動の原動力となる怒りを鮮明に描写している。また、「友のために命をかける」というメロスの心情を描写する部分は、彼の友情の深さを感じさせ、読者に強い印象を与える。さらに、セリヌンティウスがメロス信じて待つ姿勢を表現する「信じている」という言葉も、信頼の強さを印象付ける重要な表現である。これらの表現は、物語全体を通じて友情や信頼の力を強く感じさせ、読者に深い感動を与える要素となっている。

↑「なぜ印象に残ったのか」をもっと書いたほうが良いと言われたので理由を追加した

「メロスは激怒した」という表現は、物語の始まりに強い勢いを与え、メロスの性格を一瞬で読者に伝えています。また、「信じている」というセリヌンティウスの言葉は、彼の揺るがない信頼を象徴しているため、物語全体のテーマを支える重要な表現だと感じました。

⑦作者・太宰治について

太宰治は、日本の有名な作家で、1909年に青森県で生まれました。彼は人間の心の中の弱さや悩みを描くのがとても上手で、多くの人に愛されています。太宰治の代表的な作品には「人間失格」や「斜陽」があります。「人間失格」は、自分の生き方に悩む人の話で、多くの人が共感できる内容です。「斜陽」は、戦後の日本で生きる人々の姿を描いています。太宰治の作品は、読む人の心に深く響くものが多く、彼の書く文章はとても感情豊かで、読むとその世界に引き込まれます。彼の人生は、いろいろな出来事があり、時には苦しいこともありました。その経験が彼の作品に生かされています。太宰治の本は、今でもたくさんの人に読まれていて、日本の文学の中でとても大切な存在です。

⑧他作品との比較から分かること

太宰治の『走れメロス』と『津軽』を比較すると、太宰が「人間を信じたい」という思いを、理想化された物語と現実の旅という異なる形で追い求めている作家であることが一つのテーマとして浮かび上がります。『走れメロス』では、メロスとセリヌンティウスの揺るぎない友情が中心に描かれ、人間の善を純粹で劇的な形で肯定しようとしています。そこには太宰自身の迷いや弱さはほとんど表れず、「人間は信じられる」という理想が物語の力でまっすぐに提示されています。一方、『津軽』では、太宰が故郷を旅しながら、かつての友人や土地の人々との再会を通して、人間の温かさや距離感を確かめようとする姿が描かれています。こちらでは、照れや孤独、自己嫌悪といった太宰の生々しい感情が文章に滲み、理想のように一直線ではありませんが、それでも「人を信じたい」という思いが静かに息づいています。つまり、『走れメロス』は理想化された友情の物語として人間の善を高らかに宣言し、『津軽』は現実の複雑さを抱えながら人間の善を探し続ける旅として描かれていると言えます。

この二つの作品を並べて読むことで、太宰治が理想と現実のあいだで揺れながらも、最終的には「人間を信じたい」という一点に向かって書き続けた作家であることが、一本の太いテーマとして見えてきます。

⑨時代背景との関係『走れメロス』が発表された1940年頃の日本は、戦争へ向かう緊張が急速に高まり、社会全体が統制され、言論や表現も厳しく管理されていました。自由にもものを書くことが難しくなる中で、文学はまだ「個人の心」を描ける数少ない場でもありました。太宰自身もまた、文壇での立場に不安を抱え、生活も精神も不安定で、創作の方向性を模索していた時期でした。

そのような状況で太宰が選んだのは、難解な文学ではなく、誰にでもわかりやすく、明るく、普遍的な物語を書くことでした。『走れメロス』はその象徴であり、メロスとセリヌンティウスの揺るぎない友情は、太宰が心の底で求めていた「人間は信じられる」という理想をまっすぐに描いたものです。太宰自身は人間関係に悩み、裏切りや孤独への恐れを抱えながら生きていましたが、その現実とは反対の「信頼の物語」を書くことで、自分自身を励まし、同時に読者にも希望を示そうとしたとも考えられます。

また、この作品はシラーの『人質』を下敷きにしながらも、太宰独自の心理描写やユーモアが加えられ、単なる翻案ではなく、太宰の人間観が刻まれた作品になっています。戦時下の不安な空気の中で、「人を信じる」というテーマは、読者にとっても太宰にとっても、強い意味を持つものだったと考えられます。

⑩まとめ（考察）

太宰治の『走れメロス』は、戦争へ向かう緊張が高まっていた1940年という時代に生ま

れた作品であり、言論統制が強まり自由な表現が制限される中で、太宰が「人間を信じたい」という切実な願いを物語の形で結晶させたものです。当時の太宰は、精神的にも生活的にも不安定で、人間関係においても裏切りへの恐れや自己嫌悪を抱えていましたが、そうした現実とは対照的に、メロスとセリヌンティウスの揺るぎない友情を描くことで、自分自身が求めてやまない理想の人間像を物語に託しました。戦時下の不安な社会で「信頼」や「友情」を描くことは、読者にとっても太宰自身にとっても希望の灯火のような意味を持ち、太宰はシラーの原典を下敷きにしながらも、そこに独自の心理描写や人間観を加えることで、普遍的な価値を持つ作品へと昇華させました。そしてこの「人を信じる」というテーマは、SNSによる分断や他者不信が広がりやすい現代社会においてもなお、私たちに深い問いを投げかけ続けています。疑いが当たり前になり、人間関係が脆くなりがちなのだからこそ、太宰が不安と葛藤の中で描いたメロスのまっすぐな信頼は、時代を超えて「信じることの価値」を静かに思い出させてくれます。

○出典・参考文献

1. 太宰治『走れメロス』

新潮社（新潮文庫）、1951年

2. 太宰治『津軽』

筑摩書房（ちくま文庫）、1985年

3. 滝口晴生「太宰治『走れメロス』の原話をたどって」

山梨大学教育人間科学部紀要、2005年

4. 山内祥史「太宰治『津軽』論－旅と自己像の再構築－」

文学研究（国文学研究資料館紀要）、1993年

5. 奥野健男『太宰治論』

講談社、1964年

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

私は、この「走れメロス」という作品を読んで、人間の良いところと悪いところを表した作品だと感じた。また、メロスの自己肯定感がかなり高めに設定されているところもとても面白いと思った。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年（昭和15年）5月

ジャンル：短編小説

舞台：古代ギリシアのシラクサ

③あらすじ

メロスは老翁から国王（暴君ディオニス）が人を殺してると聞いて激怒し、王を殺すために王城に入ったが、警吏に捕縛されてしまった。王の前に引き出されたメロスは王と「唯一無二の友人セリヌンティウスを人質にする代わりに処刑までに三日間の日限を与えよう」という約束を交わした。メロスは、その三日間の間に妹の結婚式を挙げ、ひと眠りしたところ寝過ごしてしまい、急いで王城へ向かうが、道中さまざまなアクシデントに見舞われてしまい、心が折れかけるが、自分を励まし、なんとか約束の時間間に間に合うことができた。そして、再会した友と一度殴り合い、抱き合った。そんな二人の友情を目の当たりにした王は、人を信じる心を取り戻した。

④登場人物の分析

この作品の主人公であるメロスは、友の命がかかっている約束に寝坊したり、疲労から友を裏切ることが頭によぎったりしたものの、最後はもう約束には間に合わないと言われても友のために吐血しながら死力を尽くして走り、約束に間に合っている。

このことから作者は、人間の内面的な醜さと美しさをあらわしていると考えられる。

⑤作品のテーマについて

『走れメロス』のテーマは、「最後までやりきることの大切さ」や「相手を信じ続ける心」だと考えられる。

【理由】

本文の「寝過ごしたか～身支度を始めた。」までは友の命がかかっているわりに無責任な様子だが、その後の「メロスはざんぶと～かき分け」や「身近の一人に～殴り倒し」などの部分では友のために懸命に約束を果たそうとしている様子が描かれている。しかしその後、再び「もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。」などと諦めようとしていることがわかる表現がある。しかし、最終的には「呼吸もできず、二度、三度、口から血が噴き出た。」という表現がされているくらい必死になっている。また、「信じられているから走るのだ。」ということも書かれている。

このように、太宰治は、『走れメロス』の中でメロスが無責任や諦めそうになっているところから約束を果たすために一生懸命になっている姿を繰り返し描いて、読者に印象付けている。さらに、メロスが友からの信頼を力に変えていることが読み取れるような表現もある。

このことから、太宰治は「最後までやりきることの大切さ」や「相手を信じ続ける心」

をこの作品のテーマにしていると考えられる。

⑥印象に残った表現

「正義だの、真実だの、愛だの、考えてみればくだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。」という表現が、終盤にあることで、メロスが約束を破ってしまうのではないかと読者をハラハラさせ、物語を面白くしていると感じたため、印象に残った。

⑦作者・太宰治について

太宰治は、1909年に青森県で生まれた小説家で、本名は津島修治。既成の道徳に反抗する「無頼派（新戯作派）」の一員と称された、昭和を代表する小説家である。しかし、その私生活はひどくすさんでいて、生涯で5回の自殺未遂を繰り返し、薬物中毒や複雑な女性関係などで波乱に満ちた生活を送っていた。『走れメロス』以外にも、『人間失格』、『斜陽』、『富嶽百景』などの数々の名作を残し、1948年6月13日、38歳の若さで愛人の山崎富栄とともに入水心中した。

このような太宰治のすさんだ生活は、メロスの「私は醜い裏切り者だ。」と考えた後に「メロス、おまえは真の勇者だ。」などと矛盾した考えに変化していたり、さらにその後、「宴席の真ただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴飛ばし」など、あまり勇者とは思えない行動などの数々の変わった言動に影響していると考えられる。

⑧他作品との比較から分かること ←とても良い考察だと思いました。

『パンドラの匣』との比較

『パンドラの匣』は、「健康道場」という療養所で病と闘っていて、死をよいものだと思っている主人公の男の子が、療養所での生活を親友に宛てた手紙の形式で書かれている。この作品では、主人公の男の子が療養所にいるさまざまな人たちとの関わりを通して考え方が変化していく様子が描かれている。

一方で、『走れメロス』では、一度は親友を裏切ることが頭によぎったものの、自分を奮い立たせて最後はしっかりと約束を果たすという結末になっている。つまり、『パンドラの匣』では、「主人公が人との関わりを通して考え方が変化していく」ということが描かれていて、『走れメロス』では、「メロスが自分自身の悪い考えを自分を鼓舞して変化させて、約束を果たす」ということが描かれていると言える。

このように、二つの作品を比べることで、太宰治は周囲の人や自分自身による考え方の変化を読者に示していると分かった。

⑨時代背景との関係

『走れメロス』が発行された1940年は、日本は戦争が迫っていて、誰もが不安を覚えた時代であった。また、この作品では、「暴君ディオニスが人を殺している」などの設定があり、人々が怯えて暮らしている様子が描かれている。これは、戦争間近という状況下にいる日本の人々と似たような心境だったのではないかと考えられる。

このことから、『走れメロス』は、当時の人々にとってどこか共感できるような設定がなされていると分かる。太宰治は、そんな人々に「相手を信じる」という明るいテーマの作品を読んでもらい、心細い中で少しでも希望が持てるようになってもらいたいと思っていたのではないかと考えた。

⑩まとめ（考察）

この『走れメロス』という作品を作者や時代背景にふれながら考察することで、この作品は、読者に心のもちようを問いかけていると分かった。

太宰治は、偉大な小説家でありながら、私生活が散々であったため、どこか読者が共感

できるような作品を書くことができる人物であった。そのため、太宰治が作品に込めたメッセージは読者に響きやすいものであった。太宰治は、それを踏まえて、「最後までやりきることの大切さ」や「相手を信じ続ける心」というテーマでこの作品を完成させ、当時、戦争間近で不安を抱えている人々に希望を持たせたいと思っていたのではないかと考えた。

○出典・参考文献

1. 太宰治『走れメロス』
光村図書 教科用図書、2025年
2. 太宰治『パンドラの匣』
青空文庫、1945年

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

「メロスは激怒した」という印象的な始まり方は知っていたが、全文を読むのは小学生ぶりでそこまで覚えていなかったのがかなり新鮮な感じで楽しめました。心情や人物像がわかる場所に線を引いて、まとめながら範読を聞いたので、登場人物の人物像や、心情の変化がわかりやすいように聞くことができた。印象に残った場面はメロスが疲れて止まってしまった場面で、メロスの心情(疲労感、諦めそう、センチメンタル)をかなり細かく表現できていると思った。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治 (津島修治つしましゅうじ)

発表年：1940年

ジャンル：物語文

舞台：シラクスとそこから10里離れた村

③あらすじ

正義感が強く正直なメロスが村でひとを殺しまくってる王様を知り、やってやろうとなり城にはいっていくとつかまり王様と対面し人を信じられないと言っている。メロスは妹の結婚を見届けたいので親友を人質としてたてて、村に帰り、結婚式を見届けてからまちに走る。とちゅういろいろな困難があったが日没前にたどりつき、友と喜んでいたら王も心を動かされどちらも死なずにすんだ。

④登場人物の分析

メロス・・・村で正直に暮らしてきた。のんきで正義感が強い

セリヌンティウス・・・町で石工をしている。メロスを信頼している

暴君ディオニス・・・王。人を信じられない。正直とか馬鹿らしい

⑤作品のテーマについて

この作品のテーマは「人を信じる大切さ」ではないだろうか。

【理由】

メロスが戦うときに使うのが「信じる」ことだと思ったから。←どゆこと？

メロスは「友に信じられている」ということを原動力に走ったことから、メロスが困難に立ち向かったのも「信じられている」ということを原動力にしているから。人を信じられない暴君ディオニスに対して強い怒りを感じているから。また、暴君ディオニスとの口論のシーンで「信じる」「人の心を疑う」「忠誠」「うそ」「約束を守る」など人を信じることに関する単語がたくさんでてくることから、また「(略)人を信ずることができぬ」というのです。(略)「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ。(略)」など正義とされているメロスに敵対する暴君ディオニスは人を信じられないことから民に恐れられ、メロスに強い怒りを感じさせたから。メロスが挫折しそうになるときに「愛と誠の力」や「愛する友はおまえを信じたばかりに(略)」など人を信じることに関するワードがたくさん出てきているから。また、挫折しそうになったメロスの原動力は友に信じられているから(友は信じるしかなかったようだが)また、暴君ディオニスに心を動かされたのはメロスとセリヌンティウスがお互いを信じていたこと(信じていなかったときもあったと正直に伝えることも)だから。

⑥印象に残った表現

特に印象に残ったのは川が氾濫していたときに川の様子を表わす表現で「昨日の豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流とうとうと下流に集まり、猛省一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、こっぴみじんに橋げたを跳ね飛ばしていた。」というところ。範読を聞いた時にすごい迫力があり、状況がイメージできた。またメロスの前に立ちはだかる敵として川を泳ぎ切った時はすごいと思った。また、⑤の人を信じることに敵に打ち勝ったということも⑤のテーマの考察につながっている。

⑦作者・太宰治についてまとまっています

太宰治は裕福な家庭に生まれた。叔母や子守に育てられていた。(ちょっとさみしい?) 東京にひとりで行き、そのころはぐれたりしていた(憧れていた芥川龍之介の自殺、芥川賞をのがしたことなどが原因で借金や薬物など)かなり落ち込んでいた。結婚してからはだんだんよくなっていく。そのころ母が危篤だと連絡がはいり、お見舞いに行くところで縁を切られていた身内と関係が戻っていく。東京にもどるが東京大空襲があり、そのころにたくさん名作品を生み出す。(走れメロスもここ)青森に戻ろうと上野駅についたところで青森も空襲があったことを知る。青森では身内が迎え入れてくれ、離れて暮らすようになる。文学青年とも交流しながら作品を書いていたが東京に戻ってすぐ亡くなった。

⑧他作品との比較から分かること 走れメロスにつながる作品と比べている

太宰治の「義務」という文を読んだ。走れメロスの文章内にも「肉体の疲労回復←誤字と共に、わずかながら希望が生れた。義務遂行の希望である。」という表現があり、気になって読んでみた。かなり短い話で、まとめると依頼主からたのまれた5, 6枚の随筆で、書くことが思いつかないが自分がかかる状態にあるので義務である。金のためでなく義務のために働き、話を書いている。義務は原動力である。義務があるから生きているのだ。といった感じで太宰治は義務に対して絶対に義務を遂行するという強い気持ちがあることがわかり、義務が原動力であると分かる。「走れメロス」でもメロスが走るのは日没前について友を助けるという義務を原動力に一生懸命はしっているので太宰治のなかで義務つまり「人に信じられていることを成し遂げること」の存在が大きく、それが作品にも反映されていると言える。

⑨時代背景との関係

⑦でも書いたように走れメロスは戦時中に東京で書かれた。東京大空襲のあと三鷹で暮らし、その時に走れメロスを書きました。時代背景からの考察として、太宰本人が人間不信(20代のころ)になっていたころから、青森に母の見舞いに行った時に兄との関係が戻ったことなどから戦時中で暗い世の中だが人を信じることを大切にしようといったメッセージがこめられているのではないかと。物語の終盤にも「希望」というワードが入っているのが戦争での不安などに対しても響くような作品を書いたのではないかと。

⑩まとめ(考察)

走れメロスという作品のテーマは「人を信じること」だと考え、作品を読み返したり作者や時代背景についても調べていった。「人を信じること」はとても大切なことだがどうしてもありきたりで悪く言うと(とても悪い)きれいごとじゃないかなと思ってしまったが、太宰治について調べたことと、「義務」という話をよんでそんなことはないかと知ることができた。太宰は「義務」(人に信じられる)ことをとても大切に思っていてそれが生きる理由になっているようだったから。走れメロスも当時の太宰の状況など知ってからようむと少し見え方が変わるんじゃないかとも思った。

○出典・参考文献

1. 太宰治 「走れメロス」
光村図書 国語 2 (204～219 ページ)
2. 横浜市研修事業部 「太宰治を訪ねる」
3. 太宰治 「義務」
文學者 第二巻第四号 1940 年

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

「走れメロス」を読んでみて、自然と、主人公であるメロスやその親友のセリヌンティウスを自分と重ね合わせていた。自分なら、親友の命のために必死で走ることができるか(メロスの視点)、自分なら親友を信じて待てるか(セリヌンティウスの視点)など、登場人物の立場で物事を考えることで、それぞれの心情を理解することができた。読み終わったときに、「なぜ作者はメロスを完璧な性格にしなかったのか」と疑問に思った。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年(昭和15年)5月

ジャンル：短編小説

舞台：古代シチリア島にあるシラクス

③あらすじ

暴君ディオニスが人を信じることができずに様々な人を殺していることを知り、王を除くと決意したメロスが王城に入っていくと、警吏に捕まり王の前に引き出される。処刑されそうになったが、親友であるセリヌンティウスを人質にして三日間の猶予をもらう。そして、急いで家に帰り妹の結婚式を挙げる。その後、必死で走ってシラクスに戻る途中、様々な困難を乗り越え、諦めそうになりながらも、親友の処刑の直前に戻ることができ、それを見た王の心を変えるという物語。

④登場人物の分析

メロス...この物語の主人公で、人を疑わない純粋な性格をしている。メロスは、シラクスの街に戻る途中で投げやりになって諦めかける場面があることから、人間ならではの弱さを持った人物だと言える。しかし、水を飲み、すぐにまた歩き始めて親友との約束を守るため、立ち直りが早く、誠実な人でもあるということがわかる。

ディオニス...人を信じることができず、自分の周りの人達を殺している残虐で孤独な人物。しかし、最後には「信頼」を目の当たりにして改心する。このことから、人の心を根拠もなく疑ってはいけないという作者の考えをより強調する役割を担っていると思う。

セリヌンティウス...主人公メロスの親友であり、メロスに絶対的な信頼を置いている。処刑の直前までメロスは必ず戻って来ると信じて疑わずにいた。この確信が、メロスの走る動機を支えていたと思う。

フィロストラトス...セリヌンティウスの弟子。メロスが処刑場に着く直前に出てきて、「もう間に合わない」という誘惑の言葉をかける。このセリフは、メロスの正念場を引き出していると思う。

⑤作品のテーマについて

「友情」や「信頼」の大切さ

【理由】

単に「約束を守る」だけではとどまらず、実際に人間が持ち合わせている弱さを認めたいうえで、それを克服して育まれる本当の信頼というものが書かれているから。

具体的には、帰って来る途中のメロスが諦めそうになったり、セリヌンティウスがメロスを疑ったりする場面があることから。

作者は、「誠実な心は決して空虚な妄想ではなく、人の弱さを乗り越えてこそ築けるものである」ということを伝えたかったと思う。暴君ディオニスのセリフからも読み取れるように、ここが、作者の最も伝えたいことだと思う。

⑥印象に残った表現

「私は、信頼に報いなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス。」が印象に残った。なぜなら、この表現は、メロスが自分に言い聞かせているみたいで、自分も一緒になって走っているような臨場感を感じたから。また、もしも自分だったら、メロスのように立ち上がることはできなかったと思う。「もう十分に頑張った」と言い訳をして、諦めてしまうかもしれないから。これからの生活で、越えられないような壁に直面したときに、このメロスのセリフを思い出して、もう一歩前に進める人になりたいと思った。

⑦作者・太宰治について

太宰治は青森県北津軽郡金木村（現在の五所川原市金木町）出身で、富豪の末っ子として生まれ、放浪生活を送っていた。また、常に自己嫌悪や孤独感を感じていた。さらに、何度か自殺未遂を繰り返すなど、繊細な心の持ち主であった。こうした性格から、「人間失格」などの作品が書かれた。さらに、自尊心が強く、メロスのような人物だったと思われる。実際、「走れメロス」にはモデルになった実話があり、(通称「熱海事件」)そこでは、太宰治はメロスと違い、友達を裏切ったらしい。この出来事から、最後まで走りきった「メロス」が生まれたと思う。

つまり、太宰治は自分のよくない経験をもとに、それを良い出来事(→乗り越えたと仮定し、好ましい展開)として書いていたと思う。

⑧他作品との比較から分かること

『緒方氏を殺した者』と比較すると、どちらも「裏切り」や「信頼」というようなテーマで書かれていることがわかる。

具体的には、『走れメロス』では人を信じ抜くことで得られるものを描く一方、『緒方氏を殺した者』では、過剰な信頼が相手を追い詰めてしまうという人間関係の危なさを描いている。この二つの作品は、太宰治が抱えていた「信じることへの憧れと恐怖」という性格の二面性を表現していると思う。

⑨時代背景との関係

太宰治は戦争の前後を生き抜いた文豪である。戦争中のマイナスな雰囲気の中であえて『走れメロス』のような理想やユートピアを描くことで読者に希望を与えようとしたと思う。また、「信じる心」の大切さを当時の人達に伝えようとしていたと思う。

⑩まとめ（考察）

『走れメロス』は完璧なヒーローとして描くのではなく、あえて人間の脆さや弱さを強調し、そのうえでそれらを乗り越えた先にある救いを対照的に表現していると考えられる。また、太宰治は様々な面で「信頼」をもとにした本を書いていて、人々に信じることの重要性を伝えていたと思う。『走れメロス』は楽しく読めるものでありながらも、人々に訴えかけるような、そんな作品だと思う。

○出典・参考文献

1. 太宰治『走れメロス』
新潮社、1954年
2. 太宰治『緒方氏を殺した者』

新潮社、1980年

3. 真山知幸『残念な偉人伝』
学研プラス、2017年

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

『走れメロス』を読んで、メロスという人物は人の弱点や良いところを表しているのかなと思った。読み進めるうちに、暴君ディオニスの本当の心情は何なのか、この物語は何を伝えたかったのかなどが気になった。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年 (昭和15年)

ジャンル：短編小説

舞台：古代ギリシャのシチリア島・シラクーサ (シラクサ)

③あらすじ

メロスは大事な妹の結婚式の品々を買いに竹馬の友セリヌンティウスがいる町にやってくる。しかしメロスはその町で暴君ディオニスが人を殺していることを知る。メロスはそれに対して激怒し暴君ディオニスの王城に入ってしまう。死ぬ覚悟で来たが、妹の結婚式をあげるため3日間の日限を許す代わりに大切な友人セリヌンティウスを人質にしてよいという約束をする。無事妹の結婚式をあげ、メロスは友人を守るべくとにかく必死に走った。ギリギリ王城につきセリヌンティウスの命は守ることができ、二人は抱き合った。

④登場人物の分析

本作品の中心人物であるメロスは、物語の初めは呑気で思い立ったらすぐ行動してしまい自分に対して勇者ある男だと思っている。しかし、後半になっていくにつれ情けない所があらわれるが、粘り強さも表れている。

この変化から、作者は自分の中にある**弱さや正義**を示していると考えられる。

⑤作品のテーマについて

『走れメロス』の中心的なテーマは、「人を信じ、信頼の強さ」と「人の弱さに対しての葛藤」であると考えられる。

【理由】

物語の冒頭で描かれているメロスは、自分なりの正義を貫く人物と描かれ、自分を勇者ある男だと考えている。今まで人を信じてこなかった暴君ディオニスはメロスと出会い、一度人を信じてみることにする。メロスにいろんな出来事が起こるにつれ、ネガティブになってしまい次々と人の弱さが見れる。

このような構造から、**人を信じることの大切さ**と人の弱さにどう立ち向かっていくかがみられる。

太宰治はメロスやセリヌンティウスの関係を交え、人の弱さやを信じることの大切さを明らかにしたと思う。

⑥印象に残った表現

メロスは必死に走っている中「赤く大きい夕日ばかりを見つめていた」の場面が一番印象に残った。この表現によって、メロスはとにかく必死に走っているということが読み取れる。作者はこの表現を使うことでメロスの心情や情景を想像しやすくし、ひきつけていると感じた。

⑦作者・太宰治について

青森県北津軽郡に大地主である父津島源右衛門と母たねの六男として生まれた。11 人兄弟の 10 人目である。幼少期から文学に興味があり、旧制弘前高等学校を経て東京帝国大学仏文科に進学した。太宰治は大学時代自殺未遂を何度もするなど繊細で自尊心が強い性格であった。自殺未遂を何度かした中、一度女性と入水自殺を図ろうとしたが女性だけ亡くなるという悲劇的な結果となった。

このような作者の背景は、「走れメロス」の物語に反映されていると考えられる。物語では呑気で思い立ったら行動してしまうメロスが友達を人質にし、くじけながらも自分の名誉を守ることが描かれている。ここでは、人間の弱さを**赤裸々**に書いている。

このことから太宰治は、自信の悲劇的な経験や弱さ、醜さを土台にして、**ユーモアや皮肉**を交えた独特の文体で小説を描いていると考えられる。また、自伝的要素を織り交ぜ、自信の苦悩を表したことも考えられる。

⑧他作品との比較から分かること

『桜桃』との比較

『走れメロス』をより深く理解するために、同じ太宰治の作品である『桜桃』と比較する。『桜桃』は、太宰治の実体験をもとに自殺する前に書かれた作品である。この作品は、小説家で仕事が遅い上に家の家事も手伝わない「私」と無口で内向的な性格の「妻」の二人はお互いに不満があるが傷つきたくなく、表に出さないようにしている。だが、ついに不満がぶつかり、「私」は子育てや家事から逃げてしまうという小説。この作品では仕事ができなく金がないうえに家事もできない「私」の罪悪感を描いたものである。

一方『走れメロス』では正義感が強く、弱さがあられながらも自分の名誉を守るために走る小説である。つまり、『桜桃』は自分の弱さに気づきながらも罪悪感に潰され逃げてしまう過程を描いた作品に対し、『走れメロス』では自分の弱さがあられながらも自分の名誉を守るために立ち向かう過程を描いた作品だと言える。

この比較から太宰治は、自分が経験した人間の弱さや苦悩を赤裸々と書いていることがわかる。この 2 つの作品は人間の弱さを描いた共通されている所があるが、『走れメロス』は弱さが出つつも太宰治の理想を、対し『桜桃』はリアルに現実味をだして描いたと考えられる。

このように他作品と比べて読むことで、『走れメロス』は、人間の弱さが表れながらもそれに立ち向かう過程を描いたことで、太宰治の思う**理想の生き方**を読者に伝えたかったということが理解できた。

⑨時代背景との関係

『走れメロス』が執筆された 1940 年は、日中戦争が続く中、翌年末には太平洋戦争へと向かう緊迫した時代であった。すでに戦時体制が強化されていて、言論統制も厳しくなる世の中であった。

この時代背景を踏まえると、『走れメロス』は友情と信頼の大切さが描かれた作品でもあるため、身近にいる大切な人は大切にしようがよいということを伝えようとしていると考えられる。メロスは竹馬の友セリヌンティウスを人質にしたが、お互い信頼し合っていることから信頼している人が大事だということ、そして友情の大切さの価値を上げることによって人間の権利を訴えていることが考えられる。

このことから太宰治は、戦争真っ只中の時代を背景に、メロスやセリヌンティウス、ディオオニスの関係で暴力や不信が支配する危うさ、恐怖を表し、**友情や信頼**の重要性を描いたと考えられる。

⑩まとめ（考察）

本作品を作者の思想や時代背景と結びつき考察することで、『走れメロス』は単なる短編小説ではなく、人間の弱さを表しそれに立ち向かうことを描いた作品だと分かった。

太宰治は日々悩みながら自分の弱さを痛感し生きた人であり、それをもとに人間の弱さなどを赤裸々に描いたと考えられる。

また、時代背景からまさに戦争真っ只中で世の中は暴力や不信がとびかっているが、だからこそ友情や信頼の大切さを描き、人々に伝えたと考えられる。

この作品は SNS が身近にある現代において非常に重要な作品である。SNS が発達したことで人間関係が薄くなっているが本物の友情や信頼し合える関係性の大切さ、人間の弱さを認めながらも人を信じることの重要性を現代を生きる人々に改めて考えさせる作品である。

○出典・参考文献

1. mindmeister.jp

2.note.TraceOfEcho

3.青空文庫「桜桃」

新字新仮名

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

メロスに人質になってくれと頼まれたセリヌンティウスは自分の命を預けることなのに二つ返事で了承していて、強固な信頼関係でなければできないことだと思った。他にも物語の最後で二人は迷いを打ち明け合い、殴り合って許し合うというシーンからも深い友情と絆を感じた。このことから感想は明るい、友情ものの話だと感じた。

②作品の基本情報⁽¹⁾

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年(昭和15年)5月

雑誌『新潮』に掲載された

ジャンル：短編小説

舞台：古代ギリシャ

③あらすじ⁽¹⁾

正義感の強い牧人メロスは、人間不信から次々と人を殺める暴君ディオニスに激怒し、王の暗殺を図るが捕らえられる。処刑を宣告されるが、「妹の結婚式に出席したい」と願い、親友セリヌンティウスを身代わりに置くことで3日間の猶予を得る。

無事に結婚式を終えたメロスは王のもとへ急ぐが、川の氾濫や山賊の襲撃、激しい疲労といった障害が立ちはだかる。一時は絶望し諦めかけるが、友を信じる心を取り戻し、ボロボロになりながらも走り続ける。

約束の期限(日没)直前、処刑されようとしていたセリヌンティウスのもとにメロスが到着する。互いの心の迷いを打ち明け合い、殴り合って許し合った二人の強い絆に感動した王は、改心して二人を釈放する。

④登場人物の分析⁽¹⁾

・メロス

村の素朴な牧人。正義感が強く、嘘を嫌う真っ直ぐな性格。暴君に激怒して捕らえられるが、親友を身代わりに「友情」と「信実」を守るために走り抜く。

・セリヌンティウス

メロスの竹馬の友(親友)。シラクサの街で石工として働いている。メロスを心から信頼し、彼が戻らなければ自分が処刑されるという過酷な条件を二つ返事で引き受ける。

・ディオニス(王)

シラクサを統治する暴君。極度の人間不信に陥っており、「人は信じられない、心は変わりやすいものだ」という信念を持つ。メロスとセリヌンティウスの絆を見て、最後は心を入れ替える。

ディオニス王のモデルは実在した暴君ディオニシオス1世(またはその息子)。彼は疑り深く、多くの人間を粛清したことで知られている。

・メロスの妹

メロスが唯一の肉親として大切にしている存在。物語の序盤、彼女の結婚式がメロスの行動の動機となる。

・フィロストラトス

セリヌンティウスの弟子。メロスが戻る途中で出会い、「もう間に合わないから逃げてく

れ」と懇願する。

⑤作品のテーマについて⁽¹⁾

1. 「真実」と「友情」の尊さ
2. 自己との闘いと「誠実さ」
3. 人間性の回復と「愛」

【理由】

1. は最も中心的なテーマ。「人は人を信じられるのか」という問いに対し、メロスとセリヌンティウスが命を懸けて互いを信じ抜く姿を通して、疑念を打ち破る信頼の力を描いている。

2. はメロスは道中、疲労や困難から一度は「もういい、あきらめよう」と誘惑に負けそうになる。ここで諦めようとする人間の醜さを書いた後に「心の揺れ」を克服し、自分自身の誠実さを取り戻す過程こそが、読者の共感を呼ぶ重要なテーマとなっている。

3. は冷酷な暴君ディオニスは、二人の絆を目の当たりにして「信じる心」を思い出す。個人の友情が、他者の不信感をも溶かし、社会に希望や愛をもたらすという救済のメッセージが込められている。

⑥印象に残った表現⁽¹⁾

・メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐（じゃちぼうぎやく）の王を除かなければならぬと決意した。

→冒頭からメロスの感情が爆発して話にのめり込んで読めた。

・私は、これほど努力したのだ。約束を破ろうと試みたのでは無い。

→体が動かなくなっていて、間に合わなさそうなことを察すると自分の保身を始めるメロスに人間臭さを感じた。

⑦作者・太宰治について⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾

太宰治の本名は津島修治。

青森の大地主の11人兄弟の6男、10番目として誕生。実母よりも子守の乳母に育てられた寂しさが彼の書く小説にも現れたと考えられる。戦後はその作風から、坂口安吾、織田作之助、石川淳、檀一雄らとともに新戯作派、無頼派と称される。

生活能力は低く、井伏鱒二などから何度も借金していた記録が残っている。

彼は生涯のうちに3回自殺や心中をして、4回目で心中に成功している。

・1回目（1930年・21歳）：鎌倉・小動岬でバーの店員・田部シメ子とカルモチン心中を図り、相手のみが死亡。

・2回目（1935年）：鎌倉で首吊り自殺未遂。

・3回目（1937年）：石原美和子と温泉で心中未遂。

・4回目（1948年）：山崎富栄と玉川上水にて入水し死亡。

自殺未遂の体験を作家活動に繋げた、極めて異例の文豪である。

⑧他作品との比較から分かること⁽¹⁾⁽⁶⁾

他作品はパンドラの匣を読んだ。作者は太宰治

発表年は945年（昭和20年）10月から1946年1月まで新聞連載（単行本は1946年刊）

ジャンルは青春小説

舞台：健康道場

あらすじ

終戦直後の混乱期、結核を患った20歳の青年「ひばり」が、風変わりな療養所「健康道

場」に入所する。

個性豊かな患者や看護師たちとの交流を通じ、死への恐怖を抱えながらも、瑞々しい恋や友情を育んでいき、絶望の底にあった「パンドラの匣」から最後に見つかった「希望」のように、新しい時代を前向きに生きようとする決意が、友人への手紙として綴られる。

登場人物

ひばり（小柴利助）

主人公。20歳の青年。結核を患い「健康道場」に入所。友人宛の手紙を通じて、病や死への不安を抱えつつも、希望を持って生きようとする。

竹さん（看護婦長）

道場のマドンナ的存在。患者たちから慕われる厳しくも優しい女性。ひばりも彼女に淡い恋心を抱く。

マア坊（三浦正子）

18歳の看護助手。若々しくピチピチした生命力にあふれる少女。

個性豊かな道場仲間（患者）

道場では、社会的な肩書きを捨ててあだ名で呼び合います。

越後獅子（大月松右衛門）

中年の男性患者。元新聞記者という噂もあり、落ち着いた風情を見せる。

かっぼれ（木下清七）

28歳の独身男性。元左官屋。ひばりたちと交流し、道場の人間味ある生活を支える。

と言うような作品である。

この「パンドラの匣」との「走れメロス」の比較を書く。

走れメロスは究極の信頼（比較をするときに改行して小見出しのように書いたのが内容を理解しやすくなる構成で良いと指摘していただいた）

メロスとセリヌンティウスの間にあるのは、命を賭けた「疑いようのない信頼」である。邪悪な王という第三者に対し、人間の信実を証明するために走るという、非常にストレートで純粋な人間賛歌となっていると感じた。

パンドラの匣は絶望を超えた希望（比較をするときに改行して小見出しのように書いたのが内容を理解しやすくなる構成で良いと指摘していただいた）

結核療養所「健康道場」に入所した主人公（ひばり）が、病や死、敗戦という絶望に直面しながらも、他者との交流を通じて「生きていくこと」への希望を見出す物語だと感じた。メロスのような劇的な信頼ではなく、「足元の小さな光」を見出すような、より現実的に読者に語りかける物語だと感じた。

しかしどちらも希望や信頼など明るい感情を大きなテーマにして書いていると感じた。

⑨時代背景との関係⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁷⁾

第二次世界大戦へと向かう足音が聞こえる中、言論統制や相互監視が強まっていた。誰もが他人を疑い、本音を隠して生きるような時代において、「人を信じること」を真っ向から描くことは、一種の抵抗でもあったと考える。

⑩まとめ（考察）

『走れメロス』は他の作品や時代背景、作者の人生を知ったうえで考察すると、ただの友情物語では無く、諦めかけたりもするけど希望にすがったりして一つのことを成し遂げようとする人間についての小説だと感じた。

太宰治はバビナール中毒に苦しみ心中などを繰り返していた。そのときの体験や第二次世界大戦の前という時代背景を考えるとこの話は武力などではなく、暴君ディオニスのように信じる心こそが人の心を動かすものだというのを伝えたかったのだと考察する。

○出典・参考文献

- (1)太宰治『走れメロス』
新潮社 1940年（昭和15年）5月
- (2)『新潮日本文学アルバム 19』
新潮社 1983年（昭和58年）9月
- (3)山内祥史『太宰治の年譜』
大修館書店 2012年 12月
- (4)檀一雄『小説 太宰治』
審美社 1964年
- (5)太宰治『東京八景』
実業之日本社 1941年（昭和16年）5月3日
- (6)太宰治『パンドラの匣』
河北新報社 1946年（昭和21年）6月5日
- (7)走れメロス Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B5%B0%E3%82%8C%E3%83%A1%E3%83%AD%E3%82%B9>

※刊行年・出版社はすべて初版で記述した。

(12) 作者を調べて作品を深く味わおう

文学作品研究レポート

『走れメロス』

(太宰治)

①はじめに (初めて読んで感じたこと)

主人公メロスの心情が様々な語句を使って表されており、読み進めるのが楽しかった。メロスは親友のセリヌンティウスのために走る場面での伏線回収「走れメロス！」が印象に残ったが、それよりも最後の最後に少女との恋を匂わせる文があることで最後まで読者を引き付けていたのが感動した。また、単純なことかもしれないがこの作品が「なぜ長年教科書に掲載されている名作であるのか」と疑問に思った。

②作品の基本情報

作品名：走れメロス

作者：太宰治

発表年：1940年(昭和15年)

ジャンル：短編小説

舞台：古代ギリシャ

③あらすじ

正義感が強いメロスは友人セリヌンティウスを人質に邪智暴虐の王ディオニスとの約束と友情を守るため走る物語。メロスには様々な困難が行手を阻むが、最後まで希望を捨てず信実を胸に走り続ける。約束の時間の間際、ついにメロスは王の元まで辿り着く。メロスとセリヌンティウスは信実を確かめ合い、その様子を見た王は改心する。

④登場人物の分析

メロス：本作の主人公。正義感が強く、感情のままに行動する人物である。王の暴虐さを聞くや否やすぐさま激怒。王に挑発され、セリヌンティウスを人質にすることや出発の時間に寝坊するなどの計画性の無さも伺えてしまうが、自分の信念を貫ける心の強さも持ち合わせている。

セリヌンティウス：メロス（“唯一”としていた。アドバイスがあったので訂正）の友人。メロスを信じて人質になるという心の広さがある。途中、メロスが本当に戻ってくるのかと疑ってしまうこともあったが、そのことを素直に反省する。

邪智暴虐の王ディオニス：過去に何らかの事情があり、人を信じられない王。メロスを嘲笑い、メロスとの約束で人は信じられないことを世の中の正直者たちに見せしめてやろうと考えていた。最終的にメロスとセリヌンティウスの友情を見て感動し、改心した。

妹：メロスの妹で村の牧人結婚した。兄であるメロスを慕っており、疲労困憊の兄を心配してくれる優しい人物。

花婿：メロスの妹の花婿。メロスに突然結婚式をあげてくれと頼まれても行ってくれる。

⑤作品のテーマについて

信実とは空虚な妄想ではなく、実在しているということや最後まであきらめず希望を見出す大切さ、友情などと比較的明るいテーマがあると考えられる。

【理由】

人が信じられない王ディオニスは真実とは空虚な妄想であるとメロスを嘲笑していたが、メロスとセリヌンティウスの友情を見て王が泣き、仲間に入れてほしいと言うところまで改心していたから。また、必死に走り、諦めかけてしまったところで希望を新たに見出す場面やメロスのことを信じて待ち続けるセリヌンティウスと友のために必死に走るメロスから希望、友情が感じ取れるだろう。これらのことから信実や希望、友情がテーマだと考

えることができる。

⑥印象に残った表現

「路行く人を押しわけ、跳はねとばし、メロスは黒い風のように走った。」というメロスが希望を見だし、再び友のために走っている場面である。ここではメロスが必死で走っている様子を風というのではなく、「黒い風」と表現していたのが重く、強い走りだということが表されているように感じられ、印象に残った。

⑦作者・太宰治について

本名は津島修治。第二次世界大戦前から戦後にかけて活躍した小説家。青森県北津軽郡金木村の大地主の11人兄弟の10番目に生まれた。政治家の兄に反発して左翼活動に取り組んでいた時期もあったが、挫折。その後は自殺未遂や薬物中毒を繰り返し、1948年に玉川上水での入水自殺で亡くなった。

このような生い立ちから、太宰の作品には自身の実体験や人間の心理が丁寧に描かれているのが特徴的である。その一例として、今回の走れメロスの創作には「熱海事件」と作品の最後のひと文「古伝説と、シルレルの詩から」から太宰の実体験を心情とドイツの詩を元としていと考えられる。熱海事件の概要は次のとおりである。熱海で執筆していた太宰が檀一雄を人質に、金を借りに行ったきり戻ってこず、井伏鱒二と将棋を指していた事件を熱海事件という。メロスとは違い、太宰は戻ってこなかったが、良い友人を持ったことや心情の変化などは走れメロスに生かされていると考えられる。一方、ドイツの詩「人質」からはメロスやディオニスといった登場人物の名前や大まかな作品の流れが酷似している。つまり、太宰は自分自身を振り返ることも創作を通して行っていたのではないのか。

⑧他作品との比較から分かること

『斜陽』との比較

『斜陽』の基本情報

作者：太宰治

発表年：1947年

ジャンル：中編小説

舞台：戦後

あらすじ

日本は戦争に敗れ、元・貴族の母、かず子は叔父のいる伊豆へ移り住む。母は衰弱していき、弟は薬物に溺れてしまう。そんな中でかず子は「恋と革命」を胸に新しい生き方を模索していく。

「走れメロス」をより理解するために同じ太宰治の作品である『斜陽』と比較をする。

『斜陽』は、戦後の没落貴族の家庭を舞台に「真の革命には、もっと美しい滅亡が必要だ」という悲壮な心情を登場人物が減びていく姿で描いている。

一方、「走れメロス」では、主人公メロスが王との約束、友人・セリヌンティウスのために走り、人が信じられなかった王が改心する物語である。ここでは信実とはなんなのかや正義、友情をテーマにしていると考えられる。つまり『斜陽』は人間が没落していく心情や姿を描いているが、「走れメロス」は人を信じるということや希望について描いている。これらの比較から太宰はさまざまな人の「生き様」を描いているとわかる。どんどんと幸せから没落していくものもあれば、「走れメロス」のように人は変わることもできることを伝えているのではないかと考えられる。また、どちらの作品でも心情が繊細に描かれている。これは太宰が登場人物の人間味を表現したかったからではないだろうか。

⑨時代背景との関係

「走れメロス」が刊行された1940年はこれといった出来事はなかったのだが、執筆を進めていたであろう1939年は日中戦争の真っ只中で、景気も非常に悪くなっていた。さら

に第二次世界大戦もヨーロッパで始まっている。そんな暗い世の中で太宰は少しでも自身の希望を見出そうとこの作品を描いたのかもしれない。また、1940年は作者・太宰治の精神状態が安定していたこともあり、前向きなテーマの作品をかけるようになったとも考えられる。

⑩まとめ（考察）

作者の生い立ちや時代背景を調べることで作品のテーマや創作の経緯などを考察できるとわかった。本作では作者の精神が安定していたことや戦時中だったという時代背景、自身の実体験から希望やユーモアの詰まった作品になったと言えるであろう。

つまり太宰治は自身の体験をもとにすることでより深く繊細な心理描写を可能にし表現の幅を広げていたといえる。本作でもその筆跡は十分に残されており、これらが教科書に残り続けている名作である理由の一つだと考えた。

○出典・参考文献

1. 太宰治「走れメロス」

令和7年度 国語二年生光村図書

2. シラー「人質」小栗孝則訳「人質 譚詩」

3. Wikipedia「太宰治」

4. BOOK-OFF Online コラム

5. 太宰治「斜陽」

青空文庫 入力使用：1994年（平成6年）

6. 太宰治を訪ねる

横浜市研修事業部